

一人一台タブレット環境が導入された特別支援学級における 自立活動の支援を目指した授業実践に関する一考察

A Study on Class Practice for Support Independence Activities in Special Support Classes that Elementary School Student has Own Tablet PC

大坪 みほろ^{*1}, 北澤 武^{*2}
Mihoro OTSUBO^{*1}, Takeshi KITAZAWA^{*2}

^{*1}東京学芸大学教育学部
^{*1}Faculty of Education, Tokyo Gakugei University

^{*2}東京学芸大学情報科学分野

^{*2}Department of Technology and Information Science, Tokyo Gakugei University
Email: a131407x@st.u-gakugei.ac.jp

あらまし：本研究では、一人一台タブレット環境が導入された小学校の特別支援学級を対象に、教員がどのように ICT を活用して児童の自立活動を支援しようとするのかについて、参与観察を介して質的に分析した。その結果、児童が様々なタブレットの活用方法に触れながら、作品を発表する活動を継続して行うことで、児童が自信を持って自らを表現しようとする態度を高める可能性があることが示唆された。

キーワード：特別支援学級、自立活動、タブレット、一人一台環境

1. はじめに

近年、特殊学級に在籍する児童生徒や通級による指導を受けている児童生徒が増加しており、担当教員の専門性向上などが課題となっている⁽¹⁾。また、特別の指導領域である自立活動は、障害による学習上又は生活上の困難を克服し自立を図るために必要な知識技能を授けることを目的としている⁽²⁾。具体的には、自立活動の内容として「心理的な安定」「コミュニケーション」などの6つの区分が示されている。岩下(2015)は、小学校の特別支援学級で一人一台のタブレットを活用し、学校生活の中で自己実現ができるような取り組みを行うと、児童はタブレットそのものに対する興味が増加してしまい、本来の目的である学習としての活用が低下してしまう恐れがあることを指摘している⁽³⁾。

本研究では、一人一台タブレット環境が初めて導入された小学校の特別支援学級を対象に、教員がどのように ICT を活用し、児童の自立活動を支援しようとするのかについて、参与観察を介して質的に分析する。そして、複数の実践事例から知見と課題を明らかにすることを目的とする。

2. 調査概要

2.1 対象

都内公立小学校特別支援学級の1～5年生13名を対象に参与観察を行った。当学級の児童は知的発達障害をもち、特にコミュニケーション能力に課題があった。当学級には、2015年9月からタブレットが導入された。タブレットを活用する授業は、2015年度は週1時間、2016年度は週2時間であった。

2.2 参与観察の時期と回数

2015年11月から2016年9月までの計7回とした。

2.3 分析方法

分析は質的研究法を用いた。質的研究法とは、口頭データや観察、写真、映像などの視覚データをテキスト化し、分析に用いる研究方法である⁽⁴⁾。本研究では、ICT活用の方法、児童の活動、教員による支援の方法の観点からの参与観察と、授業者や児童へのインタビューのデータから分析を行った。

3. 実践事例と調査結果

授業時間は、1コマ45分であった。毎回の授業で、ログインとログオフを児童が行い、児童が本時で行った活動を発表する時間を取り入れた。授業の最後には教員が作成したタブレットマスターカードで本時の振り返りを行った。タブレット活用をした次の時間には、学習アプリやお絵かきソフトなど、児童が好きなことをできる時間を設けた。

以下、授業の概要や目的、ICT活用の様子と、授業者へのインタビュー結果、参与観察者の記録を述べる。紙面の関係上、7回参与観察したうちの3回の事例を示す。

3.1 事例1(2015年11月20日金曜日 第5校時)

授業概要

自分の作品を発表する授業で、今までの授業の振り返りを目的とした。新しく学級にきた児童にタブレットを活用した学習を紹介するため、これまでに児童が活動し保存した作品を選び、テレビ画面に投影して発表した。作品を選ぶ際に、教師用タブレットでストップウォッチ機能を用いて時間を計った。

授業者へのインタビュー

- ・余暇活動としてのタブレット活用を考えている。
- ・将来仕事が終わって、好きなことをする時間にタ

タブレットを使えればと思っている。

観察者の記録

タブレット活用の授業に関して、児童にインタビューを行ったところ、「普段インターネットとか使えないから楽しい」という回答が得られた。

3.2 事例2 (2016年1月15日金曜日 第5校時)

授業概要

動画撮影の授業で、動くものを動画で撮影することを目的とした。遊具で動く児童を撮影し(図1)、撮影した動画を大型モニターに投影して発表した。

授業者へのインタビュー

- ・発表でも個人プレーになってしまう。

観察者の記録

タブレットを導入してすぐの頃は、画面に自分が映るのが恥ずかしく感じていた児童も、「こんなの撮ったよ。」と話すようになっていた。

3.3 事例3 (2016年9月28日金曜日 第5校時)

授業概要

事前に撮影した写真をクイズ式で発表する授業で、写真を順序よく選択し、発表することを目的とした。児童は前時の授業では角度や大きさを変えて写真を撮影し、本時では写真を3枚選択し、順序を考えながら、大型モニターに投影して発表した。また、本時は授業者とICTを操作する教員を分け、チームティーチングの形態で授業を行った。

授業者へのインタビュー

- ・児童同士の交流が出来るように、上級生が下級生に教える活動を取り入れている。

観察者の記録

1年前のタブレットが導入された時には上手く自分の言葉で発表できなかった児童が、本時では自分の作品を堂々と発表し、その後他の児童の発表でも発表者を見ながら聞いている様子が見られた。

4. 考察

上述の事例を通して、タブレットを活用して発表する学習活動を継続することで、児童が自信を持って自らを表現することができるようになり、自立活動の内容の「心理的な安定」に繋がると予想される。事例3の観察者の記録での児童の変化からも分かるように、タブレットを導入したばかりの時期には見られないが、毎時間の授業で発表を取り入れる活動を継続していくことにより、児童の自信に繋がったと思われる。また、事例1の観察者の記録で児童がタブレットを使うことが「楽しい」と回答していたことから、授業でタブレットの様々な活用方法を体験させることや児童が好きなことをできる時間を取り入れることで、児童が「タブレットを活用することは楽しい」、「タブレットを活用してこんなこともできる」と感じるようになることが考えられる。

しかし、事例2の授業者へのインタビューに「発



図1 動く児童を動画で撮影する様子

表でも個人プレーになってしまう」とあることから、児童間のコミュニケーションに関して課題がみられた。事例3の授業者へのインタビューに「上級生が下級生に教える活動を取り入れている」とあるように、タブレット活用の仕方を児童同士で教え合う活動やグループで取り組む活動を継続して取り入れるといった工夫が必要になってくると考えられる。

5. おわりに

本研究では、特別支援学級において一人一台のタブレットを用いた自立活動を支援する授業を観察し、質的研究法で分析した。その結果、児童が様々なタブレットの活用方法に触れ、タブレットを活用して発表する活動を継続して取り入れることで、児童が自信を持って自らを表現できるようになることが示唆された。今後は、タブレットを活用した児童間の対話を多くし児童同士で交流できる活動を取り入れるとともに、児童の実態に合ったタブレット活用を工夫することで児童がより「楽しい」「もっと使いたい」と感じるような授業作りを検討する必要がある。

付記

本研究は、平成28年度東京学芸大学教育学部初等教育教員養成課程情報教育選修卒業論文「一人一台タブレット環境が導入された特別支援学級における自立活動の支援を目指した授業実践に関する一考察(大坪みほろ)」をまとめたものである。

謝辞

本研究は科研費基盤研究(C)(課題番号26350310,代表:北澤武)の助成を受けた。

参考文献

- (1) 中央教育審議会:「特別支援教育を推進するための制度の在り方について(答申)」(2005)
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05120801.htm (参照日:2016年11月29日)
- (2) 文部科学省:「特別支援学校学習指導要領解説 自立活動編」(2009)
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/1278527.htm (参照日:2016年11月29日)
- (3) 岩下幸広:「小学校特別支援学級におけるICTの活用」, 年会論文集, 第31巻, pp.20-23 (2015)
- (4) ウヴェ・フリック(著)小田博志(訳):「質的研究入門ー「人間の科学」のための方法論」, 春秋社, 東京 (2002)